

第13回 城西緩和ケア講演会～明日から役立つ緩和医療！！～

慶應義塾大学病院 薬剤部

金沢和幸

第13回 城西緩和ケア講演会が10月26日(水)19時よりオンライン開催され、今回は在宅医療・地域医療で活躍される2名の先生から非常に勉強になる講演をいただきました。

まず初めは、祐ホームクリニック千石で事務長、薬剤師として活躍されている岡崎 理絵先生より「在宅緩和ケアにおける地域医療連携 在宅療養支援診療所薬剤師の立場から」という表題で、病院でも薬局でもない診療所薬剤師としての在宅緩和ケアでの役割について実際の症例を交えて紹介いただきました。

病院から在宅緩和ケアに移行する患者さんの退院カンファレンスでは、「入院中の薬物療法の評価」や「退院時や自宅での療養中に疼痛は強くなりそうか」といった視点を持って参加することや、退院後に使用する薬局も麻薬在庫や無菌調製など対応可能かだけでなく、患者さん・家族のニーズも合わせて調整を行うことで、疼痛コントロールの要である薬物療法を入院中～自宅療養まで中断なく継続するための薬剤師の重要性を伝えていただきました。私自身の経験でも、病院薬剤師と薬局薬剤師の間で入退院時の情報共有が中々上手くいかないと感じることがある中、岡崎先生のように活躍される薬剤師がいるとことで緩和ケアの質が向上することを学びました。

続いては、ふれあい歯科ごとの五島 朋幸 先生 より「死ぬまで噛んで食べる」と題したご講演をいただきました。

五島先生は、在宅患者さんの入れ歯の治療から始まり、現場での体験を積みながら誤嚥性肺炎予防の口腔ケア、摂食嚥下障害のリハビリと訪問歯科医療のパイオニアとして歩んでこられ、現在は口腔環境を整え、口腔機能の維持・向上させて「食べることを支える」を訪問歯科診療の役割として尽力されています。

さらに「最後まで口から食べられる街、新宿」を合言葉とした新宿食支援研究会を立ち上げ、在宅でも食べたいと希望がある患者さんに対して多職種で支える食支援の体制作りにも励まれており、食支援を繋げていくためには家族や近所も含めた街づくりをし、広めていくということに感銘を受けました。

最後に、講演で挙げられた「終末期に食べる意欲があるにも関わらず、誤嚥性肺炎のリスクから絶食すべきとされた患者さんにどうするべきか」という症例について、医療者の観点だけでなく患者さんや家族がどうしたいかという希望の大切さと、今までは十分関わっていなかったことに気づき、今後の取り組みに生かしたいと感じました。

今回、お二方の講演は、患者さんに寄り添った医療を行っていくことの大切さを改めて考えていく良い機会を与えていただきました。